

教員の経験年数や漢字指導法が 児童の漢字読み書きの正答率に及ぼす影響

高橋 純 長勢美里 中沢美仁 山口直人 堀田龍也

教員の経験年数や漢字指導法が 児童の漢字読み書きの正答率に及ぼす影響

高橋 純 長勢美里* 中沢美仁 山口直人** 堀田龍也***

The influence of teaching experience or teaching method of kanji character
on children's reading and writing comprehension

Jun Takahashi, Misato Nagase, Misato Nakazawa, Naoto Yamaguchi, Tatsuya Horita

摘要

漢字の読み書きは学力の基礎として重要視されているが、教員は具体的な漢字指導法について悩んでいる。また、様々な漢字指導法のうち、どの指導法が効果的なのかあまり明らかとなっていない。そこで、本研究では、教員の経験年数、各漢字指導法の指導頻度、ICT活用が、児童の漢字読み書きの正答率にどのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、読み書きの正答率は、教員の経験年数、ICT活用歴及び漢字指導におけるICT活用頻度と関係がみられなかった。また、教員の経験年数が長いほど頻度の高い漢字指導法がみられたが、それらを用いることで、児童の読み書きの正答率が高くなるとは認められなかった。

キーワード：漢字指導法 教員の経験年数 漢字読み書き 小学校 漢字学習

Keywords : Method of Kanji Teaching, Teaching Experience, Reading and Writing of Kanji, Elementary School, Learning of Kanji

I. はじめに

我が国では、漢字の読み書きは学力の基礎として重要視されている。しかし、学校教材活用指導法研究会(2014)が行った調査では、教員は「字形や書き順の指導法」や「日々の取り組ませ方」等、授業場面での具体的な指導法に悩んでいることが明らかとなった。また、棚橋(2013)は、「漢字指導について統一された方法はなく、各教員の経験に基づいている」ことを指摘している。そこで、経験豊かな教員がよく用いる漢字指導法や、それらの指導法を用いることにより児童の漢字の読み書きの正答率が上がるかといったことが明らかになれば、これらの問題解決の一助になると考えた。総合初等教員研究所(2003)等の先行研究では、漢字の読み書きの正答率や誤答分析といった調査結果は多くあるが、漢字指導法と正答率の関係まで言及したものはあまりみられない。

本研究では、小学校教員を対象に、普段授業で用いている各漢字指導法の指導頻度を調査するとともに、児童を対象に漢字の読み書きの正答率、教員の経験年数等を調査する。それらの結果から、教員の各漢字指導法の指導頻度、教員の経験年数やICT活用が、児童の漢字読み書きの正答率に、どのような影響を及ぼすかについて検討する。

II. 方法

2.1. 対象とした教員と児童

全国各地の教員が参加する教育関係のメーリングリストを通じて調査協力者を募集した。応募した小学校教員16名を調査対象とした。20代が1名、30代が4名、40代が10名、50代が1名であり、3年生担任が4名、4年生が3名、5年生が4名、6年生が5名であった。

さらに、当該教員が担任する児童475名(3年生101名、4年生77名、5年生151名、6年生146名)を対象とした。

2.2. 教員の属性に関する調査

教員歴、ICT活用歴、漢字指導におけるICT活用頻度を尋ねた。教員歴は、経験年数の回答を求めた。ICT活用歴は、ICTを活用して指導した経験年数の回答を求めた。漢字指導におけるICT活用頻度は、デジタルテレビ、プロジェクタ、電子黒板、パソコン、実物投影機、デジタル教科書、デジタル教材、フラッシュ型教材の8つのICTについて、「毎日」「週数回」「月数回」「年数回」「まったく」のいずれかで回答を求めた。

2.3. 「漢字指導法調査」用紙の作成

漢字指導法の指導頻度を調べるための教員が回答する調査用紙の作成を行った。まず漢字指導に関する書籍

* 上市町立上市中央小学校, ** 株式会社教育同人社, *** 東北大学大学院

表1 「漢字指導法調査」用紙の作成の際に参考にした漢字指導に関する書籍

No.	書籍名	著者	発行所
①	ベテラン先生直伝漢字ドリルの活用法	学校教材活用指導法研究会	株式会社教育同人社
②	「学校教材活用法」リーフレット		株式会社教育同人社
③	学校教材の使い方ミニ研修		株式会社教育同人社
④	「向山型国語」の授業づくり	椿原正和	明治図書出版株式会社
⑤	漢字の効果的な指導	谷和樹・三浦宏和	明治図書出版株式会社
⑥	向山型漢字指導の技術	田口広治・岩崎秀幸	明治図書出版株式会社
⑦	目から鱗の漢字指導法	TOSS 加賀	明治図書出版株式会社
⑧	国語の学力が伸びる生活習慣	石黒修・TOSS 熊本・TOSS 愛知教育サークル	明治図書出版株式会社
⑨	向山型国語入門 Q & A 小事典	松藤司	明治図書出版株式会社
⑩	向山洋一全集 新・黄金の三日間で一年間を成功させる	向山洋一	明治図書出版株式会社
⑪	どの子も伸びる漢字・音読指導のステップ	伴一孝	明治図書出版株式会社
⑫	小学校の国語1日で攻略	松山英樹ほか	株式会社育研社, 株式会社扶桑社
⑬	漢字指導法	岡篤	株式会社高文研
⑭	たのしく学ぼう漢字	田村利樹・乗木養一・紺屋富夫	株式会社ルック
⑮	口で言えれば漢字は書ける!	道村静江	株式会社小学館
⑯	学力のつくノート指導のコツ	佐藤正寿	有限会社ひまわり社
⑰	若い教師の成功術	大前暁政	学陽書房
⑱	教師のすごい指導法!	城々崎滋雄	学陽書房
⑲	学級担任のための普通教室 ICT 活用術	國眼厚志	明治図書出版株式会社
⑳	新任教師のしごと授業の技77!	伊藤護	小学館
㉑	新卒教師時代を生き抜く初任者1ヶ月の成功シナリオ	野中信行	明治図書出版株式会社

表2 「漢字指導法調査」用紙の作成の際に参考にした漢字指導に関する資料

	資料名	出版社名	URL
㉒	生きてはたらく漢字の力をつける～「くりかえし漢字ドリル」の活用～	新学社	http://www.sing.co.jp/cms/school/e1_mate/file/drillk2-1.pdf
㉓	生きて使える漢字習得法「楽しい」を武器にしよう!	新学社	http://www.sing.co.jp/cms/school/e1_mate/file/drillk2-2.pdf
㉔	やる気アップで漢字をマスター『まんてんスキル漢字』の効果的な活用をめざして～	新学社	http://www.sing.co.jp/cms/school/e1_mate/file/drillk3-1.pdf
㉕	ていねいさを重視した毎日の指導で漢字を定着!	ベネッセ	http://www.teacher.ne.jp/d/2014/print/kanji001jirei.pdf
㉖	ダウンロードプリント活用でくりかえし漢字を学習!	ベネッセ	http://www.teacher.ne.jp/d/2014/print/kanji002jirei.pdf
㉗	学期末の漢字コンテストにまとめプリントを活用!	ベネッセ	http://www.teacher.ne.jp/d/2014/print/kanji003jirei.pdf
㉘	学期末の漢字オリンピックで意欲を高める!	ベネッセ	http://www.teacher.ne.jp/d/2014/print/kanji004jirei.pdf
㉙	漢字歌の音読で楽しく漢字をおぼえる	日本標準	http://www.nipponhyojun.co.jp/htdocs/kurikan/
㉚	「ドリル」で毎日の漢字練習を習慣に	日本標準	http://www.nipponhyojun.co.jp/htdocs/kurikan04/
㉛	ドリル使い方ナビ「くりかえし漢字ドリルD」の使い方	光文書院	http://www.kobun.co.jp/howtonav/drill/kokugo/tp_d.html
㉜	ドリル使い方ナビ「くりかえし漢字スキルS」の使い方	光文書院	http://www.kobun.co.jp/howtonav/drill/kokugo/tp_s.html
㉝	実践アイデア「漢テス」システム	光文書院	http://www.kobun.co.jp/idea/kokugo/11.html
㉞	実践アイデア「デジ漢」でできる, こんなこと	光文書院	http://www.kobun.co.jp/idea/kokugo/15.html
㉟	実践アイデアやっぱり漢字がかんじん!	光文書院	http://www.kobun.co.jp/idea/kokugo/14.html
㊱	漢字筆順教育アプリ「そらがき」	文溪堂	http://www.bunkei.co.jp/bunkei-app/soragaki/

21冊(表1)及び漢字ドリルを市販している5社から発行されている漢字指導に関する資料15件(表2)から、漢字指導法に関する記述を全て簡体書きで抽出し表にまとめた。そして、複数の書籍に記述があり、重要と考えられる指導法を調査項目とした。これらは、研究者2名、教材会社社員4名、調査対象者ではない小学校教員1名、学部学生2名らで議論を行い決定した。

その結果、「写し書きをさせている」など、89件の質問にまとめられた(表3)。それらの質問について、頻度を尋ねるために「いつも」「だいたい」「あまり」「まったく」「あてはまらない」のいずれかで回答を求めた。「あてはまらない」は、デジタル教科書等の設備がなく、実施できない場合に回答することを想定した。

2.4. 「漢字実態調査」用紙の作成

児童が回答するための漢字の読み書きに関する調査用紙の作成を行った。学年ごとに異なる読み取り20問、書き取り20問が出題される調査用紙とした。作成の際は、1) 差がつきやすい、熟語、送り仮名付きを多く出題する、2) とめ、はね、字形などについて、しっかりと学習できていない児童にとっては誤りやすい漢字を出題する、3) 所要時間は定めず、児童ができるまでを前提とした出題にする、といった方針で、漢字テスト等の開発経験が豊富な教材会社社員が原案を作成し、研究者2名と議論を行い完成させた(図1)。その際、児童や保護者にテストと感じさせない工夫や、氏名を記入させないといった個人情報保護にも配慮した。

表3 「漢字指導法調査」の調査項目及び指導頻度の結果 (Q1～Q75)

設問	漢字指導法に関する質問	頻度
Q1	ドリルの裏表紙等に表示されている「使い方」を児童と確認している	3.4
Q2	ドリルに出てくる太字や記号、マーク等の意味を児童と確認している	3.4
Q3	漢字学習の進め方を決め、児童にも伝えている	3.8
Q4	いつ漢字学習を行うのかを決め、児童にも伝えている	3.5
Q5	ドリル、ノート、筆記用具等、必要なものを机上に置かせている	3.5
Q6	ドリルやノートの正しい置き方、位置を指導している	3.4
Q7	漢字練習をする際のノートの書き方の手本を示している	3.5
Q8	シャープペンシルではなく、鉛筆を使わせている	4.0
Q9	正しい姿勢で書くように意識させている	3.8
Q10	正しい鉛筆の持ち方で書くように意識させている	3.1
Q11	新出漢字の学習を、宿題にするのではなく、授業中に行っている	3.7
Q12	1回に練習する新出漢字の文字数は決まっている	3.7
Q13	授業前に今日習う漢字を示している	2.1
Q14	指書きをさせている	3.1
Q15	空書きをさせている	3.8
Q16	なぞり書きをさせている	4.0
Q17	写し書きをさせている	4.0
Q18	ドリル巻末等にあるチェック表にシールを貼ったり、印をつけたりさせている	2.4
Q19	指書きを何度も繰り返して練習させている	2.8
Q20	書き順を唱えさせながら指書きで練習させている	2.9
Q21	手に何も持たずに指書きをするよう指示している	2.9
Q22	人差し指を机の上につけて指書きをするよう指示している	2.6
Q23	とめ・はね・はらいに気を付けて指書きをするよう指示している	2.9
Q24	空書きを何度も繰り返して練習させている	3.6
Q25	書き順を唱えさせながら空書きをさせている	3.7
Q26	腕をピンと伸ばして空書きをするよう指示している	3.1
Q27	空書きをしている間は、実物投影機で新出漢字を大きく映している	3.3
Q28	ずれないようになぞり書きをするよう指示している	3.9
Q29	書き順を唱えながらなぞり書きをさせている	2.8
Q30	マスから決してはみ出さないよう指示している	3.6
Q31	お手本とそっくり書くよう指示している	3.7
Q32	書き順を唱えながら写し書きさせている	2.6
Q33	教師が範読した後に、児童が音読して読みの練習をしている	3.4
Q34	パリエーションをつけて、読みの練習を繰り返している	2.8
Q35	ページ内にあるコラムや雑学にも触れ、目を向けさせている	3.0
Q36	初めて書きの練習をさせるときは、平仮名からではなく、漢字の字形を見ながら書くよう指導している	3.1
Q37	とめ・はね・はらい、送り仮名などに気を付けている	3.6
Q38	書きの練習では、新出漢字のみでなく、例文も含めてノートに練習させている	3.7
Q39	書きの練習では、新出漢字のみを取り出して、ノートに練習させている	2.1
Q40	児童のよいノートをモデルとして見せている	3.2
Q41	漢字練習の宿題を出している	3.6
Q42	宿題の内容は学年で話し合っ決めて決めている	3.2
Q43	毎回の宿題の取り組みを児童に記録させている	1.9
Q44	毎日漢字の確認テストをしている	2.6
Q45	週末に漢字テストを行っている	2.7
Q46	学期末に漢字テストを行っている	3.9
Q47	児童に、漢字テストの実施日を予告している	3.5
Q48	児童に、合格点を予告している	3.1
Q49	出題する文字数はいつも決まっている	3.8
Q50	漢字テストの頻度や、出題範囲など、サイクルを決めている	3.9
Q51	漢字テストの前に、ミニテストやプレテストを行っている	3.3
Q52	漢字テストの前に、漢字テストと同じ問題で何度も練習させている	3.3
Q53	漢字テストの直前に、指書き等で範囲内の漢字を確認させている	2.1
Q54	漢字テストは教師が丸付けをしている	3.4
Q55	間違えた問題だけを練習または再テストさせている	3.6
Q56	間違いの多い漢字はもう一度全体で指導している	3.8
Q57	漢字テスト後、何らかの方法で児童一人一人の点数を公表している	2.1
Q58	漢字テストはファイル等にまとめて保管させている	3.4
Q59	マス黒板を使って書き順の指導を行っている	1.3
Q60	実物投影機を使って指導している	3.3
Q61	実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	2.9
Q62	実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の熟語や用例を確認している	2.9
Q63	実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の書き順を練習している	3.1
Q64	実物投影機を使って、ドリルを映し、語句や例文を使って読み方を練習している	2.8
Q65	実物投影機を使って、教師がノートに書き込む様子を映し、ノート指導を行っている	3.1
Q66	実物投影機を使って、子どものよいノートを映し、紹介しながらノート指導を行っている	2.9
Q67	デジタル教科書を使って指導している	2.0
Q68	デジタル教科書を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	1.7
Q69	デジタル教科書を使って、新出漢字の熟語や用例を確認している	1.7
Q70	デジタル教科書を使って、新出漢字の書き順を練習している	1.7
Q71	デジタル教材を使って指導している	2.8
Q72	デジタル教材を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	2.8
Q73	デジタル教材を使って、新出漢字の熟語や用例を確認している	2.7
Q74	デジタル教材を使って、新出漢字の書き順を練習している	2.8
Q75	フラッシュ型教材を使って指導している	2.8

表3 「漢字指導法調査」の調査項目及び指導頻度の結果 (Q76～Q89)

設問	漢字指導法に関する質問	頻度
Q76	フラッシュ型教材を、朝学習や授業前の休み時間等、授業外の時間で行っている	2.9
Q77	フラッシュ型教材を使って、語句や例文を使って読み方を練習している	2.5
Q78	フラッシュ型教材を使って、学校での漢字指導や取り組みを家庭に伝えている	3.1
Q79	漢字テスト（小テストや週末テスト等）の実施日を家庭に伝えている	2.1
Q80	家庭学習での注意点を家庭に伝えている	3.0
Q81	宿題中はテレビを消すよう伝えている	3.0
Q82	毎日決まった時刻に宿題をするよう伝えている	3.0
Q83	毎日決まった場所で宿題をするよう伝えている	2.9
Q84	宿題に取り掛かる前に机の上を片付けるよう伝えている	2.9
Q85	必要な道具のみを机の上に置くよう伝えている	2.7
Q86	宿題が終わったら、保護者に確認してもらうよう伝えている	2.8
Q87	漢字指導法を全校で統一している	1.3
Q88	漢字指導法を学年で統一している	2.6
Q89	漢字指導法に関する研修を校内で行っている	1.6

2.5. 調査の手順

- 漢字指導法調査，漢字実態調査，教員の属性に関する調査の各調査用紙を調査協力者の小学校教員に郵送した。
- 小学校教員は，児童に対して時間制限を設けずに漢字実態調査を実施した。加えて，自らは漢字指導法調査，教員の属性に関する調査に回答をした。両者共に採点や集計などを行わずに返送した。
- 漢字実態調査の採点を行う際には，採点基準を定め，複数回のチェックを行って信頼性を高めるようにした。
- 漢字指導法調査から各指導法の指導頻度，漢字実態

調査から漢字読み書きの正答率を求めた。そして，漢字指導法調査と教員歴の関係，漢字実態調査と学年，教員歴，ICT活用歴及び漢字指導におけるICT活用頻度の関係について分析を行った。さらに漢字指導法調査と漢字実態調査の関係の分析を行った。

Ⅲ. 結果

3.1. 教員の属性に関する調査

教員歴は平均17.8年 (SD=7.6) であった。ICT活用歴は平均7.4年 (SD=3.6) であった。

漢字指導におけるICT活用頻度については，回答を，

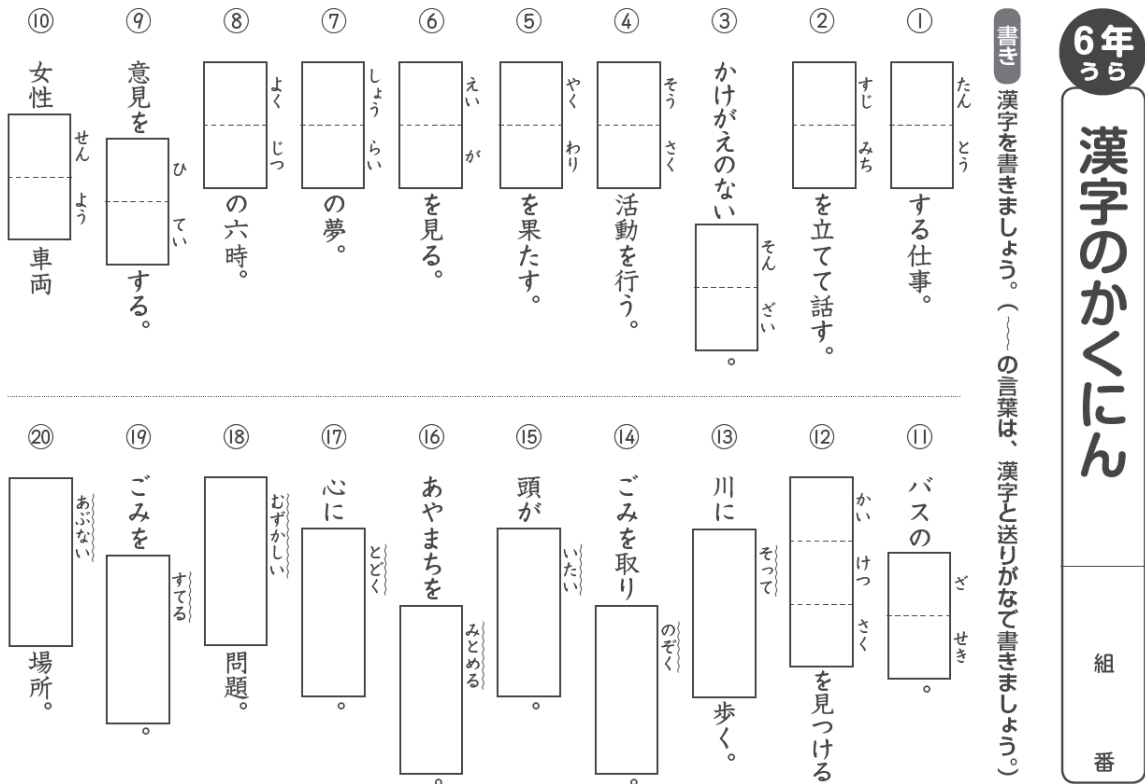


図1 作成した「漢字実態調査」用紙の例 (6年生，書き取り)

毎日 (5 点), 週数回 (4 点), 月数回 (3 点), 年数回 (2 点), まったく (1 点) で平均を求めたところ, デジタルテレビは 1.7, プロジェクタは 3.9, 電子黒板は 1.3, パソコンは 3.6, 実物投影機は 4.3, デジタル教科書は 1.4, デジタル教材は 3.0, フラッシュ型教材は 3.1 であった。

3.2. 漢字指導法調査

3.2.1. 全体

漢字指導法の指導頻度の回答を, いつも (4 点), だいたい (3 点), あまり (2 点), まったく (1 点) として平均を求めた。その際, あてはまらないと回答されていた場合は, 集計から除外された。除外されたことで, Q67-70 のデジタル教科書関係は 6 名, Q71-74 のデジタル教材関係は 12 名, Q75-77 のフラッシュ型教材関係は 10-13 名が集計の対象となった。

各漢字指導法の指導頻度の平均を表 3 に示す。全体の平均は 3.0 (SD=0.64) であった。上位 10 位と下位 10 位までを表 4, 5 に示す。最も頻度が高かった漢字指導法は, Q8 (シャープペンシルではなく, 鉛筆を使わせている), Q16 (なぞり書きをさせている), Q17 (写し書きをさせている) の 4.0 であり, これらは全員が「いつも」と回答していた。反対に, 最も頻度が低かった漢

字指導法は, Q59 (マス黒板を使って書き順の指導を行っている), Q87 (漢字指導法を全校で統一している) が, 1.3 であった。

3.2.2. 教員の経験年数との関係

教員の経験年数との関係を分析するために, 1-10 年 (4 名), 11-20 年 (5 名), 21 年以上 (7 名) の 3 区間に区切り, 回答の平均を求めた。教員の経験年数が 1-10 年では 2.7 (SD=0.91), 11-20 年では 3.1 (0.76), 21 年以上では 3.1 (0.61) であった。分散分析した結果, 有意な差が認められた ($F(2,264) = 5.58, p < .01$)。HSD を用いた多重比較によれば, 1-10 年 < 11-20 年 = 21 年以上であった ($MSe = 0.59$)。

さらに詳細に教員の経験年数と各漢字指導法の指導頻度の関係を分析するために, 相関係数を求め, 相関係数の有意性検定を行った。その結果, 両者に正の相関があったものが 6 件, 負の相関があったものが 6 件あった (表 6)。最も大きな正の相関がみられたのは, Q76 (フラッシュ型教材を, 朝学習や授業前の休み時間等, 授業外の時間で行っている, $r = 0.75$) であり, 最も大きな負の相関がみられたのは, Q24 (空書きを何度も繰り返して練習させている, $r = -0.59$) であった。

表 4 漢字指導法の調査結果 (上位 10 位)

番号	設問内容	平均
Q8	シャープペンシルではなく, 鉛筆を使わせている	4.0
Q16	なぞり書きをさせている	4.0
Q17	写し書きをさせている	4.0
Q46	学期末に漢字テストを行っている	3.9
Q28	ずれないようになぞり書きをするよう指示している	3.9
Q50	漢字テストの頻度や, 出題範囲など, サイクルを決めている	3.9
Q49	出題する文字数はいつも決まっている	3.8
Q56	間違いの多い漢字はもう一度全体で指導している	3.8
Q3	漢字学習の進め方を決め, 児童にも伝えている	3.8
Q9	正しい姿勢で書くように意識させている	3.8
Q15	空書きをさせている	3.8

表 5 漢字指導法の調査結果 (下位 10 位)

番号	設問内容	平均
Q59	マス黒板を使って書き順の指導を行っている	1.3
Q87	漢字指導法を全校で統一している	1.3
Q89	漢字指導法に関する研修を校内で行っている	1.6
Q68	デジタル教科書を使って, 新出漢字の音読み, 訓読みを確認している	1.7
Q69	デジタル教科書を使って, 新出漢字の熟語や用例を確認している	1.7
Q70	デジタル教科書を使って, 新出漢字の書き順を練習している	1.7
Q43	毎回の宿題の取り組みを児童に記録させている	1.9
Q67	デジタル教科書を使って指導している	2.0
Q53	漢字テストの直前に, 指書き等で範囲内の漢字を確認させている	2.1
Q13	授業前に今日習う漢字を示している	2.1

表 6 各漢字指導法の指導頻度と教員の経験年数との相関

番号	設問内容	相関係数
Q76	フラッシュ型教材を, 朝学習や授業前の休み時間等, 授業外の時間で行っている	0.75
Q87	漢字指導法を全校で統一している	0.66
Q32	書き順を唱えながら写し書きをさせている	0.58
Q89	漢字指導法に関する研修を校内で行っている	0.57
Q43	毎回の宿題の取り組みを児童に記録させている	0.55
Q29	書き順を唱えながらなぞり書きをさせている	0.52
Q15	空書きをさせている	-0.48
Q28	ずれないようになぞり書きをするよう指示している	-0.48
Q11	新出漢字の学習を, 宿題にするのではなく, 授業中に行っている	-0.52
Q25	書き順を唱えさせながら空書きをさせている	-0.52
Q49	出題する文字数はいつも決まっている	-0.56
Q24	空書きを何度も繰り返して練習させている	-0.59

3.3. 漢字実態調査

3.3.1. 全体

読み取りの正答率は77.7% (SD=4.70)、誤った回答が書かれていた誤答率は20.8% (7.47)、回答欄が空欄であった無答率は1.5% (1.48)であった。書き取りの正答率は42.9% (10.43)、誤答率は48.9% (6.71)、無答率は8.2% (6.87)であった。

3.3.2. 学年による違い

学年によって正答率が異なる場合、学年をまたいだ比較が困難になるため、学年による正答率の差があるかを調べた。読み取りでは、3年生の正答率の平均が75.6% (SD=12.12)、4年生が79.8% (10.61)、5年生が75.5% (13.65)、6年生が79.9% (15.29)であった。分散分析した結果、有意な差は認められなかった ($F(3,471)=2.08, ns$)。同様に書き取りでは、40.1% (12.16)、45.6% (13.48)、40.9% (17.95)、45.0% (14.35)であり、分散分析の結果、学年による正答率の違いに有意な差は認められなかった ($F(3,471)=1.40, ns$)。

3.3.3. 教員の経験年数との関係

読み取りの正答率は、経験年数1-10年の教員が担当する児童の平均は80.2% (SD=3.8)、11-20年では76.0% (5.2)、21年以上では77.7% (4.2)であった。分散分析の結果、教員の経験年数による正答率の違いに有意な差は認められなかった ($F(2,13)=0.84, ns$)。

同様に書き取りでは、48.5% (4.1)、38.6% (10.8)、42.9% (11.2)であった。分散分析の結果、教員の経験年数による正答率の違いに有意な差は認められなかった ($F(2,13)=0.92, ns$)。

さらに教員の経験年数と正答率の相関係数を求め、相関係数の有意性検定を行ったが、読み取り・書き取り共に、相関はみられなかった。

3.3.4. ICT活用歴との関係

それぞれの教員のICT活用歴と、読み取りの正答率の相関を求め、相関係数の有意性検定を行ったところ、有意な差は認められなかった ($F(1,14)=0.06, ns$)。

同様にICT活用歴と書き取りの正答率の相関を求め、相関係数の有意性検定を行ったところ、有意な差は認め

表7 各漢字指導法の指導頻度と正答率との相関（読み取り）

番号	設問内容	相関係数
Q14	指書きをさせている	0.64
Q40	児童のよいノートをモデルとして見せている	0.55
Q20	書き順を唱えさせながら指書きで練習させている	0.48
Q19	指書きを何度も繰り返して練習させている	0.47
Q36	初めて書きの練習をさせるときは、平仮名からではなく、漢字の字形を見ながら書くよう指導している	0.46
Q35	ページ内にあるコラムや雑学にも触れ、目を向けさせている	0.45
Q4	いつ漢字学習を行うのかを決め、児童にも伝えている	0.43
Q88	漢字指導法を学年で統一している	0.43
Q61	実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	-0.44
Q62	実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の熟語や用例を確認している	-0.44
Q79	デジタル教科書を使って、漢字テスト（小テストや週末テスト等）の実施日を家庭に伝えている	-0.45
Q64	実物投影機を使って、ドリルを映し、語句や例文を使って読み方を練習している	-0.47
Q68	デジタル教科書を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	-0.79
Q69	デジタル教科書を使って、新出漢字の熟語や用例を確認している	-0.79
Q70	デジタル教科書を使って、新出漢字の書き順を練習している	-0.79

表8 各漢字指導法の指導頻度と正答率との相関（書き取り）

番号	設問内容	相関係数
Q38	書きの練習では、新出漢字のみでなく、例文も含めてノートに練習させている	0.74
Q41	漢字練習の宿題を出している	0.64
Q82	毎日決まった時刻に宿題をするよう伝えている	0.64
Q7	漢字練習をする際のノートの書き方の手本を示している	0.59
Q37	とめ・はね・はらい、送り仮名などに気を付けさせている	0.57
Q27	空書きをしている間は、実物投影機で新出漢字を大きく映している	0.51
Q83	毎日決まった場所で宿題をするよう伝えている	0.50
Q35	ページ内にあるコラムや雑学にも触れ、目を向けさせている	0.49
Q9	正しい姿勢で書くように意識させている	0.46
Q49	出題する文字数はいつも決まっている	0.46
Q79	漢字テスト（小テストや週末テスト等）の実施日を家庭に伝えている	-0.45
Q67	デジタル教科書を使って指導している	-0.87
Q68	デジタル教科書を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している	-0.93
Q69	デジタル教科書を使って、新出漢字の熟語や用例を確認している	-0.93
Q70	デジタル教科書を使って、新出漢字の書き順を練習している	-0.93

られなかった ($F(1,14) = 0.52, ns$).

3.3.5. 教室の漢字指導における ICT 活用頻度との関係

デジタルテレビ、プロジェクタ、電子黒板、パソコン、実物投影機、デジタル教科書、デジタル教材、フラッシュ型教材の8つについて、漢字指導における活用頻度と、読み取りの正答率の相関をそれぞれ求め、相関係数の有意性検定をそれぞれ行った。その結果、有意な差が認められたものは一つもなかった。

同様に、8つのICTと書き取りの正答率についても分析を行ったが、有意な差が認められたものは一つもなかった。

3.4. 漢字指導法調査と漢字実態調査のクロス分析

3.4.1. 読み取り

読み取りの正答率と、各漢字指導法の指導頻度の関係を分析するために、相関係数を求め、相関係数の有意性検定を行った。その結果、両者に正の相関があったものが8件、負の相関があったものが7件あった(表7)。最も大きな正の相関がみられたのは、Q14(指書きをさせている、 $r=0.64$)であり、最も大きな負の相関がみられたのは、Q68(デジタル教科書を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している、 $r=-0.79$)といったデジタル教科書の活用に関するQ68-70であった。

3.4.2. 書き取り

同様に書き取りも分析した。その結果、両者に正の相関があったものが10件、負の相関があったものが5件あった(表8)。最も大きな正の相関がみられたのは、Q38(書きの練習では、新出漢字のみでなく、例文も含めてノートに練習させている、 $r=0.74$)であり、最も大きな負の相関がみられたのは、Q68(デジタル教科書を使って、新出漢字の音読み、訓読みを確認している、 $r=-0.79$)といったデジタル教科書の活用に関するQ68-70であった。

IV. 考察

4.1. 正答率と教員歴との関係について

正答率は、教員の経験年数と関係がみられなかった。漢字指導法調査のQ89(漢字指導法に関する研修を校内で行っている)は1.6と低かった。研修があまり行われないため、独自の指導法に頼りがちとなり、経験年数ほどに正答率の向上に効果のある指導技術が身に付けにくい可能性が考えられる。

その一方で、教員の経験年数が11年以上の教員は、1-10年と比較して、漢字指導法調査の平均値が高かった。経験年数の高い教員は、より多様な漢字指導法を用いていることやそれらの指導頻度が高い可能性が考えら

れる。Q17(写し書きをさせている)は、全員が「いつも」実施していると回答していたが、Q32(書き順を唱えながら写し書きをさせている)は、経験年数が高いほど指導頻度が高かった。同様の関係は、Q16(なぞり書きをさせている)とQ29(書き順を唱えながらなぞり書きをさせている)にもみられた。経験年数の高い教員は、児童に単に写し書きといった活動のみをさせるのではなく、書き順を唱える活動を加えるといった工夫をしていた。

しかし、経験年数の高い教員にとって高頻度の漢字指導法と正答率に明確な関係はみられなかった。読み取りでは、Q14、Q19、Q20の指書きに関する指導頻度と正答率に正の相関がみられた。また、書き取りでは、Q38(書きの練習では、新出漢字のみでなく、例文も含めてノートに練習させている)や、Q41やQ82のような宿題を出すことや宿題の取り組ませ方といったことと正の相関がみられた。これらは、経験年数の高い教員にとって高頻度の漢字指導法と必ずしも一致しない。したがって、経験年数の高い教員にとって指導頻度が高い漢字指導法は、低い教員とは異なる傾向があるとはいえるが、それが直ちに正答率の向上につながっていないと考えられる。

4.2. 正答率と ICT の関係について

正答率は、ICT活用歴及び教室の漢字指導におけるICT活用頻度との関係もみられなかった。ICT活用そのものは直接的に正答率の向上に寄与していないと考えられる。

実物投影機の活用を例に考察するならば、読み取りのQ61、Q62、Q64は正答率と負の相関がみられた一方で、書き取りのQ27のように正答率と正の相関がみられたものがある。このように実物投影機を使っても効果が逆転しているケースがみられた。したがって、実物投影機を活用する影響よりも、どのような漢字指導法を用いるかの影響の方が大きいと予想される。例えば、Q61(実物投影機を使って、ドリルを映し、新出漢字の音読み、訓読みを確認している)は、模造紙等に新出漢字を提示しても、同様に負の相関がみられる可能性がある。あくまでも実物投影機は、漢字指導法を支援する道具であると考えた方が適切と考えられる。

また、デジタル教科書の活用に関しては、Q68-Q70の指導頻度と正答率に負の相関がみられた。しかし、デジタル教科書はわずか6名の教員のみが活用可能な状況であったことを考えると、今後、さらに詳細に分析していく必要がある。

将来、紙媒体で提供されてきた教材がデジタル化していくことが想定される。その際、教材のデジタル化は効果的な漢字指導法を意識しながら開発していく必要があるだろう。例えば、石塚ら(2004)は、冊子とPDAの漢字ドリルの比較において、冊子ドリルの方が、成績が

向上したことを明らかにしている。単に教材をデジタル化すれば、直ちに正答率が向上するわけではないことを示している。

したがって、正答率の向上に寄与していた「例文を含めた練習」や「宿題の取り組ませ方」といった指導法をデジタル化によってどのように支援するかを検討していく必要があるといえるだろう。さらに、例えば堀田ら(2015)は、小学校教員が漢字書き取りの採点時に重視する誤答パターンと、実際の誤答の出現率の関係を調べ、両者が強く関係していないことを明らかにしている。こういったことも踏まえながら、紙媒体の教材と同様に、デジタル教材を利用したり開発したりする際であっても単に経験に頼るだけではなく、正答率の向上に基づいて適切な指導方法を選択する必要があると考えられる。

V. おわりに

本研究では、小学校教員を対象に各漢字指導法の指導頻度や、児童を対象に漢字の読み書きの正答率を調査した。それらの結果から、教員の各漢字指導法の指導頻度、教員の経験年数やICT活用が、児童の漢字読み書きの正答率に、どのような影響を及ぼすかについて検討した。その結果、読み書きの正答率は、教員の経験年数、ICT活用歴及び漢字指導におけるICT活用頻度と関係がみられなかった。また、教員の経験年数が長いほど頻度の高い漢字指導法がみられたが、それらを用いることで、児童の読み書きの正答率が高くなるとは認められなかった。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、前橋市立城南小学校の笠

原晶子先生、株式会社教育同人社の皆様、調査に協力をいただいた先生方、富山大学高橋研究室の皆様には多大なる御協力をいただきました。深謝申し上げます。

文献

- 学校教材活用指導法研究会(2014)ベテラン先生直伝漢字ドリルの活用法. 株式会社教育同人社, 東京
- 堀田龍也, 中沢美仁, 長勢美里, 山口直人, 高橋純(2015)小学生の漢字書き取りにおける誤答の分布および教員の採点における重要度に関する分析, 日本教育工学会研究報告集, JSET15-3, pp.175-182
- 石塚丈晴, 堀田龍也, 小川雅弘, 山田智之(2004)小学生を対象としたPDAを用いた漢字ドリル学習システムの開発. 日本教育工学会誌, 27 (Suppl.): 303-306
- 棚橋尚子(2013)漢字の学習指導に関する研究の成果と展望. 国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ, 全国大学国語教育学会, pp.293-300
- 総合初等教育研究所(2003)教育漢字の読み・書きの習得に関する調査と研究【第3回調査2003年実施】. <http://www.sokyoken.or.jp/kanjikeisan/pdf/kanji0503.pdf> (参照日 2015.03.29)
- 高橋純, 長勢美里, 中沢美仁, 山口直人, 堀田龍也(2015)小学校教員の各漢字指導法の指導頻度と児童の漢字読み書きの正答率の関係, 日本教育工学会研究報告集 JSET15-3 pp.167-174

(2015年8月31日受付)

(2015年9月25日受理)